

障害のある人への継続的な就労支援を行うための「できること」についての情報構築
- 特別支援学校の教員と保護者の連携の下での「できますシート」の書式の検討 -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析クラスター
林 炫廷

本論文は、特別支援学校に通う高等部の生徒を対象に、筆者が学生ジョブコーチとして支援を行った職場実習での実践をもとに、継続的な就労支援のための情報移行のあり方について検討したものである。

支援実践の主な目的は2点であった。1つは、ホームセンターにおける実習を通して、どんな条件があれば生徒の「強み」や「できること」が出現するのかを観察し、それらのできることの過程を詳細に記録することであった。また、できることを三項随伴性の枠組みを用いて表現することで、記録の機能性が高まるかどうかについて検討することも目的とした。2つめは、「できる」情報を次の支援者（教員や保護者）に伝達するために、情報移行の書式を試作し評価することであった。そして、教員と協同で作成したできる情報の書式である「できますシート」が、どれほど機能的であるのかを検討するため、教員と保護者を対象に、次の活動・実習場面における具体的な行動目標、および実習内容の計画案を記述してもらうことを目的にした。

研究の手続きとして、実践研究1においては、筆者が学生ジョブコーチの役割を行い、実習における対象生徒の行動観察の記録をとった。実践研究2においては、教員とケース会議を通して「できますシート」を作成した。作成した「できますシート」を参加者5人に配った。

結果、実践研究1においては、学生ジョブコーチの役割としてスケジュールの改善や声かけ、社会的な賞賛などの支援を行い、記録を取ることができた。また、記録によって、対象生徒の「できること」を表現でき、多くの発見できた「できること」を機能的に分析する事ができた。実践研究2において、参加者に情報を伝達していく過程では、ケース会議を通して教員とのやり取りができ、連携を持つことができた。連携の成果として、教員と協同で「できますシート」の書式の改善ができ、教員や保護者が理解しやすい書式づくりができた。特に、「できますシート」の書式改善の過程において、次の支援者に対象生徒の情報を伝達していく際には、対象生徒が実習を通して学んだ「できたこと」が、機能的な行動として捉え「できること」としてまとめて一般的な表現をしておくことが重要であると示唆された。また、「できたこと」を機能的にまとめて「できること」に書けたことは、ある意味繰り返し確認できたことであり、「できたこと」の中にはまだ疑問が残る場合もあり、そこで、「確認したいこと」という欄を設けることが必要であることが打ち合わせ中に示唆された。次の実習場面や展開においてできることを繋ぐために、できるのを活かしつつ確かめたいことを試したら、確実に生徒のできることが増えていくことができると考えられた。

その他、ケース会議を行う時、対象生徒の情報記録が教員の手元にあることや情報の可視化によって、同じ情報を共有することができた。さらに「できますシート」の書式に情報を集約することによって、次の支援計画や生徒の行動目標の設定を多く考えることができた。対象生徒のできる情報が記録され、蓄積し、次の人に伝達していくといった情報移行システムは、継続的な就労支援の重要な役割を持つことであると示唆された。